

OSIM FOR SOME BETTER TIMES
24th MAY 1992

誌上再現!
オシム監督が辞任を
決意した日

オシムが戻る

混乱を極める旧ユーゴ代表の中で

その時、モザイク国家ユーゴスラビアで、それまで長期に渡って指揮を執っていたイヴィツァ・オシム監督が、故郷の内戦が影響し、周囲の反対の中、辞任を決意した。悩んだオシムの真意、認めない会長、混乱を極める代表内部。一体、その時何が起きたのか? 当時の新聞がすべてを物語る。

オシム監督の経歴
トド・ヴラドイェビッチ
イヴィツァ・オシム
ミラン・ミルニチ
ミラン・ミルニチ
トド・ヴラドイェビッチ
イヴィツァ・オシム
ミラン・ミルニチ



ユーゴスラビア代表は監督不在で 欧州選手権スウェーデン大会に臨む

旧ユーゴスラビアスポーツ日刊紙「スポルト」(ベオグラード発行、1992年5月24日、日曜日、第12409号、発行45周年)より

昨日ユーゴスラビアサッカー協会が開かれた記者会見で、代表監督はユーゴ92でブラーヴィイ(ユーゴ代表の愛称で「青」を意味する)の指揮を執らないという決断を発表した。しかしミリヤン・ミリヤニッチ会長は、オシムは今まで通り、ブラーヴィイの指揮官の座にとどまり、協会としては新監督を探さず予定はないということを繰り返し述べた。またブランコ・プラトヴィッチ事務局長も、オシムは解任されたわけではなく、解任される予定もないと強調。ツァプリノヴィッチ、ポボヴィッチ両コーチがフィレンツェ遠征およびスウェーデン遠征において監督代行を務める。

フィレンツェ遠征に参加する代表候補選手18名発表

候補選手18名は、本日午後1時までにベオグラードのホテル「ハイアット・リージェンシー」に集合し、フィレンツェ遠征に出発して5月27日水曜日にフィレンティーナと親善試合を行う。その18名は以下の通り。

オメロヴィッチ	ナイドスキ
レコヴィッチ	ノヴァク
スタノイコヴィッチ	ユーゴヴィッチ
ラディノヴィッチ	ヨカノヴィッチ
ドゥバイツ	サヴィチェヴィッチ
ペトリッチ	ストイコヴィッチ
ブルノヴィッチ	ミヤトヴィッチ
ミラニッチ	ミハイロヴィッチ
ヴヤチッチ	パンチェフ

オシムが昨日の記者会見でその決断を発表!

「スウェーデンには行けない」
「私の決断は個人的なものとして扱ってほしい。この決断に関してこれほどの騒ぎが起こっているのは残念だ。説明することはあまりない。私がサラエボ生まれであることはあなたがたも覚えているはずだし、あの町で何が起きているのかもご存じだろう」と、代表監督は報道陣に語った。

イヴァン(本名)・オシムはユーゴスラビア代表監督の座にとどまるものの、ブラーヴィイの指揮官としてもっとも成功を収めた彼が、スウェーデンで開催される欧州選手権本大会に参加しないのだ!

代表のベンチには、イヴァン・ツァプリノヴィッチとヴラディツァ・ポボヴィッチが座る。対等の立場にあるコーチ2名が組む監督代行コンビだが、クウェートから帰ってきた男(注:イヴァン・ツァプリノヴィッチのこと)が形式上は「ボス」となる。

それでも、ユーゴ92に向けて準備中のユーゴスラビア代表のDデーとして待たれていた昨日の記者会見において、もっとも重要な情報は確定していない。ミリヤン・ミリヤニッチ協会会長は、オシムがそれでもなお職務を全うするという選択肢をまだ残し

ている。しかしながら、何らかの奇跡によりサラエボ国内の戦闘が終結することが条件だろうと考えれば、この選択がとられる可能性は極めて小さい。

代表監督は正午ちょうどにサッカー協会本部に到着したが、ミリヤニッチ会長及びブランコ・プラトヴィッチ事務局長と共に、多数の報道陣の前に姿を現したのはその40分後だった。おそらくその間に、スウェーデンでブラーヴィイの指揮を執らないというオシムの決断を変えさせるための説得が密室で行われていたものと思われる。

それでも、すべての疑問を明らかにしたのはオシム本人だった。手を震わせ、目を潤ませながらも、しっかりと声で、代表監督は次のように語った。

「私の決断は個人的なものとして扱ってほしい。このことに関してこれほどの騒ぎが起こっているのは残念だ。説明することはあまりない。私がサラエボ生まれであることはあなたがたも覚えているはずだし、あの町で何が起きているのかもご存じだろう」

かなり明快な発言である。我々の「同業者」ですら十分わかるほどに明快だ(編集部注:筆者が西欧のジャーナリストを指して皮肉つ

ているのは明らか。西欧のメディアは以前、オシムはボスニア人なのでボスニアでの戦争を理由に辞任すると大々的に報じており、セルビアのメディアはもちろんそれに反感を持っていた。彼らは昨日も、現状のオシムが世界一不幸な代表監督である理由を理解するために——理解する能力があればの話だが——記者会見に大勢詰めかけていた。

その上、ユーゴスラビア人でありサラエボ人(またはサラエボ市民)であるオシムの人間的な大きさは、次の言葉によってさらに裏付けられた。

「私しかないわけじゃない! 今までのすべての仕事を、協力して行ってきたのだ。今あなたがたの目の前にある代表候補のリストもそうだ。それに、このリストは我々の状況を暗示している。これは最終的なリストではない。なぜなら、いくつかのことを調べるための試合に向けて作られたものだからだ(編集部注:5月27日のフィレンツェでのテストマッチのことを指している)」

だがそれでも、やはり本題に戻らざるをえなかった。

「私にそれができるとは思えない。フィレンツェにもスウェーデンにも行かないのだから。リストはもうお渡しした。もしご質問があれば、ここにいるツァブラ(注:アシスタント・コーチのイヴァン・ツァプリノヴィッチの愛称)がすべて説明してくれるだろう。今は彼がチームのボスだ」。オシムはそう付け加えると、この日初めて笑顔を見せた。「いや、いや。ボスはオシム監督のままです」と、ツァプリノヴィッチはすぐさま反応した。するとオシムは次のように続けた。

「このリストにある選手の一部は、今回の騒ぎのせいで、スウェーデン遠征に行かないと言った。この話も皆さんに伝えなければならぬ。私はそういった選手たちを説得して、一人の人間に縛られる理由など何もない、むしろ代表のユニフォームに縛られるべきだと話した。彼らの大部分にとって今回は一生に一度のチャンスなのだから、私のせいでそれを無駄にすることになってはもったいない」とオシムは語った。

そして、そういうオシムの人間性こそが、過去のユーゴスラビア代表監督に欠けていたものなのだ。彼の決断は尊重するほかない。これは、過去と現在の指導者が盲目であったがために、この国ユーゴスラビアが引きずり込まれてしまった狂気をもたらした当然の結果でしかない。今回はその犠牲者がイヴィツァ・オシムで、敗者となったのはユーゴスラビアサッカーなのだ。